伊神権太『町の扉』を読む

伊神権太（本名 孝信）さんが『町の扉』という本を出版した。伊神さんは今年5月から学部の非常勤講師を担当しており、それが「縁」で記者時代の興味深い話を聞くことができた。この本は講義や話に登場した「記者生活」物語であり、さっそく一気に読ませてもらった。

「町の扉」という題は、地方記者の家族にとって行く先々が掛けがえのない土地で転任のつど、頁をめくるように新しい世界が開けていった、こんな体験を実感した奥さまの発想から決めたという。

本書は「駆け出し・現場百回―入社後と松本編」から始まる。伊神さんの新聞記者としてのスタートは昭和43（1968）年4月であり、スポーツ総局の整理から校閲に回る。そして翌年8月に松本支局に赴任した。最初の赴任地が松本であり、私が信州大学人文学部3年のときである。ちょうど大学「紛争」が燃え盛っていた頃だ。偶然にも、若き新聞記者と「紛争」に疲れていた学生として、二人は松本の地で暮らしていたのである。松本時代のことを書き始めると長くなるので、伊神さんとの不思議な「縁」だけを指摘しておきたい。

伊神さんはその後も一枚の紙切れ（辞令）で地方に赴任していく。伊勢志摩・岐阜・名古屋社会部（小牧通信局）を経て、石川県七尾・大垣・大津・一宮と「熱血記者」として活躍し、文化芸能局部長や編集局デスク長などを歴任する。定年退職後は中日ドラゴンズ公式ファンクラブ事務局に勤めている。中日新聞も「取材に全国を駆け回ったことが、まるで昨日のことのように生き生きと描かれる。かかわった人々が実名で登場し、人と土地への愛情にあふれた一冊」と紹介している。私がとくに興味をもった取材は、長良川決壊や岐阜県庁汚職事件である。「地方を歩いた新聞記者の実録ルポルタージュ」の一読を勧めたい。

（2008年1月2日　記）